

## 発達・教育研究の課題と挑戦

### —波多野完治先生記念シンポジウム—

**企画者** 白井 博 (北海道教育大学)  
 子安増生 (京都大学)  
 内田伸子 (お茶の水女子大学)  
 高橋恵子 (聖心女子大学)  
**司会者** 高橋恵子 (聖心女子大学)  
 白井 博 (北海道教育大学)

**話題提供者**  
 里見 実 (國學院大学) #  
 中垣 啓 (早稲田大学)  
 守屋慶子 (立命館大学)  
 内田伸子 (お茶の水女子大学)

2001年5月23日、96歳で急逝された波多野完治先生はスケールの大きなユニークな学者であり、そして、教育者であった。先生はとりわけ聞き上手で、学生・若い人々から話をきき出し、「ほう、ほう、そうかね」とその気にさせる達人であった。思い切った新しい発想に跳んでみる勇気を先生からいただいた人は少なくないであろう。

このシンポジウムでは、波多野先生が力を注がれた多数の領域（文末の文献を参照されたい）から4つを選び、それぞれの領域の、もっともふさわしい研究者に、心理学や教育学の研究や実践において重要だと考える問題の中で、特に、これは波多野先生にきいていただきたい、コメントを是非もらいたいという話題を提供していただくことにした。これをとおして、波多野完治先生を偲び、先生がわれわれに残されたものは何であったかを考えるとともに、これからの発達・教育研究の課題と挑戦について議論する場としたい。

#### 生きる力—セレスタン・フレネにおける<生>と労働の概念

里見 実

一冊の本を眺めながら、この文章を書いている。松樹美代治編著『生活建設の教育』（1981）で、編著者の松樹氏は、昭和11年から16年まで女満別小学校の校長だった人だ。昭和14年の秋に女満別小を訪れた波多野先生は、この学校の並々ならぬ「教育文化の高さ」に驚嘆され、その印象記を『教育科学研究』

誌に寄稿された。その一文は本書にも収録されているが、私が昨今、この本を紐解くことが多いのは、松樹氏の「教育を見直す」という論文に瞠目しているからだ。著者が就任にあたって教職員に向けて書いた文章で、「教育の転換」に深く思いを致しつつ、かれの学校づくりの基本構想を提示したものである。私にとって興味深いのは、これもまた波多野先生とは因縁の深いフランスのセレスタン・フレネの「現代学校」の思想と実践と、それがあまりにもよく響き合っていることである。両者とともに流れているのは、現場人としての経験に裏打ちされた「生の哲学」だろう。日仏の二人の教師のペダゴジーを対照しながら、「教育の見直し」の論理を探ってみたいと思う。

#### 波多野完治先生とピアジェ心理学の継承

中垣 啓

波多野完治先生は日本におけるピアジェ心理学の最大の紹介者である。それどころか、1920年代に既にピアジェの論文紹介を盛んに行っており、これは1930年代アメリカにおいてピアジェが評価される以前のことであるから、世界的に見ても先生はピアジェ心理学の豊饒性と将来性を洞察しえた最初の研究者であったと言って過言ではない。単にピアジェ紹介の先鞭をつけられたというだけではなく、それ以降ピアジェ心理学の発展とともに先生の紹介活動もそれと相即する形で行われ、ピアジェ紹介活動は

1920年代の初期ピアジェから1970年代の晩期ピアジェにいたるまで精力的に続けられた。日本において『波多野なくしてピアジェなし、ピアジェなくして波多野なし』といわれる所以である。

にもかかわらず、今日に至るまでピアジェ心理学は日本において根付くことはなかった。これは波多野完治先生自ら認めておられたことで、先生にお会いするたびに先生が嘆かれていたことでもある。そこで、先生の生涯にわたる御尽力にもかかわらず日本においてピアジェ心理学が定着することがなかったのはなぜかを、この話題提供では考えてみたい。この考察と反省を通して波多野先生のピアジェ啓蒙活動の遺産を受け継ぐことに寄与できればと願っている。

### 心理学者の心理学的認識の発達 守屋慶子

ここでは、波多野完治氏の70年余にわたる心理学的認識の発達を以下の二つの視点から俯瞰してみたい。

1. 心理学的認識の発達の原動力はどのようなものであったか

コミットした時代や社会的状況、他の領域の研究者たちとの思想的交流などを、氏の研究活動の原動力という視点から検討してみる。

2. 心理学の失敗の歴史は心理学的認識の発達にどう活かされたか

科学の発展にとって貴重な示唆は、輝かしい成功を収めた科学の歴史ではなく、むしろ失敗した科学の歴史から与えられるといわれることがあるが、波多野心理学では失敗した心理学がどのように活かされているのであろうか。

このような視点から氏の心理学的認識の発達を検討してみたい。

### 文章心理学の課題 内田伸子

文学界で近代読者論が起こり心理小説が台頭した

時代背景のもと、波多野文章心理学がうち立てられた。波多野先生は、第1に、思想と文章の一致が困難であること、第2に、心理小説の勃興により心理の叙述、分析、解剖が重要視されるようになったことから「新しい文学の開拓のためには文章研究が不可避の前提」であると考えて文章研究に取り組み始めた。子どもの発達過程を探る臨床法と比較文学の素養が窺われる方法論を用いて、内外の幾多の文学作品をまるごと対象にして「文章修飾の創造は新しい考えの創造に他ならない」(『文章心理学』)という視点から独自のディスコースの分析法を編み出し、統計学的手法を駆使して作品の構造分析や作家の性格や読者の評価の違いを生む心理学的基礎を解明し、ことばと認識の関係に迫ってゆかれた。

波多野文章心理学の確立は視聴覚教育の体系化の時期と重なっている。前者は言語を、後者は非言語を扱う点では別物だが、「どちらもコミュニケーションという共通項をぬっていけば、わたしの研究に特異の性格が出てくる」(『文章診断学』)と考えられたのである。

波多野文章心理学の体系化のあとを辿り、「情報単位」ではなく「意味」を、無機質な「こしらえもの」ではなく血の通った「ディスコース」を扱える文章研究へと軌道を修正する方途を探ってみたい。

~~~~~

### 波多野完治先生の代表的なお仕事

・『波多野完治全集 全12巻』(1990~1991)

(12巻の内容：①文章心理学、②文章診断学、③現代のレトリック、④ピアジェ一人と思想、⑤心理学—認識と感情、⑥児童心性論、⑦児童観と児童文化、⑧映像と教育、⑨ことばの心理と教育、⑩学ぶ心理・教える心理、⑪生涯教育論、⑫教育者たちの肖像—世界と日本)

・『吾れ老ゆ故に吾れ在り』(1993)

・「俳句文体論の成立」(1995)

・「社会心理学的死生観—老年期を生きる」(1997)